2014

J・A・C

千葉支部だより

平成 26 年9月発行

日本山岳会千葉支部

発行者 諏訪吉春
編集者 吉野聰
事務局

（第28号）

「山の日」記念シンポジウム開催

講演する小疇尚名誉教授

「山の日」の成立を記念した県民シンポジウム「房総の山の魅力と富士山を語る集い」が６月２９日(日)、千葉市中央区の県立中央博物館講堂で開かれ、千葉の山の魅力に関する講演に約１８０人が耳を傾けた。単なる休日に終わらせるのではなく「もっと地元の山に親しんでもらおう」と千葉支部が主催し、中央博物館が共催。さらに東京湾周辺域の人と自然、文化について研究している東京湾学会が後援した。

支部会員で明治大学名誉教授の小疇尚（こあぜたかし）さんが『房総の山なみ』をテーマに基調講演。「房総半島は数百万年前、火山をのせる南海の島がフィリピン海プレートの動きで北上し、本州に衝突して伊豆半島になるとともに、海底の地層を激しく押し上げて丹沢山地が生まれた時代に丹沢―嶺岡隆起帯の東端に島として洋上に姿を現わした」と熱っぽく語った。カエルの研究で知られる博物館主任上席研究員の大木淳一さんは「真冬から初夏にかけて、房総の山間部の田んぼや渓谷に耳を澄ますとカエルの鳴き声が聞こえてくる。季節ごとにいろいろな種類が楽しめる」と鳴き声の音声を会場に流して県内に生息するカエルを紹介した。

また、千葉支部が約３年がかりで踏査した『房総半島の分水嶺』について山口文嗣山行委員長が「日本には浅間神社が１３００社ほどあるが、うち県内には２５７社と全国一。分水嶺上にも浅間神社が多くあり、房総と富士山とのつながりの深さが感じられる」と報告。博物館副館長の中村俊彦さんが「房総の人が毎日仰ぎ見てきた富士山、これは悠久不変の遠景として、日々刻刻変わる近景や四季折々の中景とともに人々の心の基底をなし、房総の魅力にもなっていた」と話し、講演を締めくくった。

（三木雄三）

＝関連記事２面に掲載＝

２００席の会場、ほぼ埋まる。大盛況のシンポ会場

「分かりやすい」と好評

来場者に配るパンフレットや会場準備のため、午前９時前には会場入り。中村副館長と最終的な打ち合わせをした。気になるのは天気。上空は黒い雲が低く垂れこめ、千葉市中心部の高層ビルも姿を隠す。

それでも講演開始３０分前の午前１０時頃から来場者が姿を見せ、１３０部用意したパンフレットはあっという間に無くなった。急きょ、さらに５０部ほど印刷。これも千葉日報と朝日新聞にシンポジウムの案内が掲載された効果とうれしくなった。１０時半には２００席ある会場はほぼ埋まり、「この天気じゃ…」と人出を心配していた支部役員もほっとした様子。

大盛況のシンポ会場

高橋琢子さんの司会で始まり、自然地理学、地形学が専門の小疇さんが基調講演。「千葉県は最も高い愛宕山が４０８メートルで、全国で最も山の低い県。そればかりでなく、地学的な定義にかなう山がない唯一の県…」と序論。その成り立ちを展開し、房総が『丘陵』から『山』に成長出来ない原因については「他の山地、山脈に比べて全体に地層が新しく岩が柔らかいため、隆起速度が大きいのに浸食も速く進むため山地になれない」と説明した。

山武市から来た金子信子さんは「主人とハイキングに出かけるのが趣味。色々な話を聞くことができて、分かりやすい地学の説明で全く知らなかった地層にも興味がでてきた。今度、養老渓谷へ行ったら見てみたいし、カエルの話も面白かった。しかし、あの美しい富士山が最後には崩れて山の一生を終えると聞き、驚いた」。東金市の星とも子さんは「山に登るだけの山男の集まりだと思っていたが、植物から文化、そして富士山信仰まで興味深い話題が豊富でとても楽しかった。ふるさと会津の山も好きだが、冬になったら千葉の山も歩いてみたくなった。こうした催しをまた計画してほしい」と好評。

午後の部ではコメンテーターの吉永英明さんが会場の人たちに「写真が好きな人、絵を描くのが好きな人、いろいろな人が山岳会にはいます。きょうのシンポジウムを切っ掛けに山岳会に入ってみようと思う人は、ぜひ一声かけて下さい」と呼びかけた。

千葉支部は、「山の日」記念の第２弾として１１月８日(土)、一般県民を対象に『南総里見八犬伝』の舞台で知られ、安房三山の一つに数えられる富山(とみさん)で「房総ネイチャーハイキング」を実施する。博物館の協力で研究員が動植物、地質などを解説する。

鳴 虫 山 山 行

湯下正子

８月 2 日(土)、鳴虫山山行に参加しました。低山山行ではありましたが、私にとっては 11 ヶ月ぶりの山行でハラハラ不安な思いの参加でした。そんな思いで望んだ山行でしたので暑さも気にならず、神ノ主山までの杉の木の根の張った急登を一歩一歩確認しながら上りました。

約１時間で神ノ主山山頂に到着し小休憩。ここから鳴虫山まで急登のピークを幾つも幾つもじれったくなるくらい越えているうち、雷の音が聞こえポツリポツリと雨が降り始めました。

神ノ主山から鳴虫山への登山道はアカヤシオの木々におおわれ薄い緑の葉が心地好い香りをかもしてくれました。尾根に出ると汗ビッショリの体にひんやりとした山の風が全身を爽やかに包んでくれました。雷鳴が大きくなり雨模様の気配に、鳴虫山の頂上は木々に覆われていないので、三木さんの判断で山頂直下の昼食となりました。会友の金子さんがわざわざ担いできた冷たい梨やキュウリの漬物に全員感激しながらも雨が心配になり昼食を早めに切り上げ出発しました。

登山口から約 3 時間でやっと鳴虫山の山頂に到着しました。ここで記念写真。

雷鳴と雨が恐怖となり、急いで下山しました。

下山道も独標まで急坂で私の足は一歩一歩足場を見つけながらの下山でした。独標を越えたあたりからは赤土で滑りそうな怖さに慎重に足元を確認しながら歩きました。無事に憾満ヶ淵まで下山できたときは神様に感謝、そして優しく援助してくれた参加メンバーの方々に感謝でいっぱいでした。無事に下山できたことが嬉しく憾満ヶ淵の通りの赤い帽子のお地蔵さんに笑顔で挨拶してしまいました。

帰りの電車の時間がなく、かき氷を電車に持ち込んで夢中で食べて終わった時は体中の疲れが抜けていくようでした。

期　日：2014 年 8 月 2 日(土)

参加者：柳川しげよ（L）・真希、吉永英明、諏訪吉春、三木雄三、山崎完治、
塩塚生二、宇津木仁典、高橋琢子、湯下正子、大浦陽子、金子有美子、
新井好夫、竹園清孝、田代貴征、小板橋史朗　以上 16 名

コース：東武日光駅(９：４０)―登山口(９：５５)―神ノ主山(１０：５０)―山頂直下(１２：２０昼食)―鳴虫山山頂(１３：００)―独標(１４：１５)―憾満ケ淵(１５：１５見学)―東武日光駅(１６：００)。

上高地散策（初夏の風に吹かれて河童橋から徳沢へ）

小澤けい子

梅雨真っ只中、貸切バスで１２名、マイカーで１名、計１３名の参加で７月５日早朝沢渡の駐車場に集合。

前日の午後１０時に千葉と津田沼を出発のころからは雨模様、諏訪湖サービスエリア内での仮眠をとる頃には雨脚が強くなり今日の上高地散策は出来るのかなと少し心配をしたが沢渡からは三台のタクシーに分乗して上高地へ。

参加者１３人の思いが通じたようで小雨模様になってきた。上高地の代表的な河童橋を十分に堪能して山岳会上高地山岳研究所に行き、さっそく荷物を預け雨除けなどの身支度を整えて明神池までゆっくり散策に出発。

三木さんから木々の名前や上高地の成り立ちなどの話を聞き、結城さんから写真の写し方について教えてもらいながら明神池へ。

穂高神社の奥社にお参りした後に明神池の中に入場券で入り、湖面に垂れ込めた霧に幻想的な風景がみられた。雨も上がり青空が覗き、明神岳などの周りの山々が見えてきた。昼食には早いので徳沢園まで行くことになり、それぞれのペースで歩く。

徳沢園では昼食と休憩を取る。嘉門次小屋でのいわなの塩焼きとビールを食べたいので早めに出発をした。途中の道でさるに出会ったのにはびっくりで３０匹以上のさるの行列は圧巻だった。また、以前から食べてみたかった塩焼きを堪能して皆がいる小梨平に合流して今夜の山研に戻った。

山研では千葉支部の貸切だったのでそれぞれが持ち寄ったお酒で大いに盛り上がった酒宴が持てた。

６日は朝の散歩として河童橋や田代橋まで歩いたようだ。その後朝食を済ませ、山研の人からミニ水力発電の話を聞いたり、後片付けを済まし、お土産を買ったりそれぞれの時間を過ごし、早めに上高地を後にした。

今回は新婚旅行で来た思い出の上高地、また、初めての上高地で山の雰囲気を味わったという千葉支部の山行に初めて４名の方がいました。3名の方から会友への入会がありました。

私もそれほど多くはない上高地はいつも山の頂上を目指す入口だったり、帰り道だったりで上高地での散策は多いに実りのある散策だった。

期日：　２０１４年7月４日（金）～６日（日）

参加者：結城純一（Ｌ）、諏訪吉春、三木雄三、山口文嗣、岩尾富士夫、山崎完治、
田代貴征、塩塚生二、小澤けい子
（ゲスト）竹園清孝、大野智子、廣村恵美子、鈴木さと子　（敬称略）

上 高 地 写 真 グラフ

明 神 近 くの 梓 川

雨上がりは荒れた様相を見せる。上高地で有名なケショウヤナギは河川の氾濫によって自らの林が破壊されることによって存続できる。ケショウヤナギの林はしばらく氾濫がないとハルニレやサワグルミ、ドロノキなどの森林に移り変わり、さらに時間がたつと梓川・河童橋下流で見られるシラビソやウラジロモミの林に変わっていく

サ ル の 親　子

徳沢から明神へ向かう梓川左岸の通称「槍ケ岳街道」で出会ったサルたち。子どもを背に乗せたり、腹に抱っこさせたりして、約10頭単位の群れが次から次と坂道を上ってきた。カメラを向けるとにらまれた

岳 沢 湿 原 に て

梓川右岸の湿原にはレンゲツツジ群落やトモエソウ群落のほかツルアジサイ、オオカメノキ、ダケカンバの巨木が見られる。対岸の「槍ケ岳街道」と比べ、静かだ。河童橋から明神までは徒歩約1時間の距離。時間をかけてゆっくり観察したいコース

岳 沢 展 望 ベ ン チ に て

徳沢から小梨平に戻ると、天気もすっかり回復して岳沢が姿を現わした。キャンプ場の売店で缶ビールを買い込み、雲が上がる岳沢を眺めながら楽しんだ

大　菩　薩　北　尾　根　下　降

柳川しげよ

私たちは前日のうちに介山荘に入っていた。朝、標高１８９７メートルにもかかわらず、気温は２０度を超え、汗ばむ暑さ。昨日は上日川ダム付近からきれいな富士山が見えていたが、今朝は富士山の姿はない。午前６時４０分に小屋を出発して１時間、森林に囲まれた大菩薩嶺頂上に到着した。ここから丸川峠への道を５分ほどで別れ、７時５５分いよいよ北尾根の下降が開始となる。地図読みが不慣れな私は昨日、地図とコンパスの使い方を黒田リーダーや山口サブリーダーから念入りに教わったが、いよいよ北尾根だという地点に来ても、「北尾根入口」を示す標識などどこにもない。さらに人が踏んだ登山道らしき道もない。「いったいどこへ行ってしまうやら」と不安でいっぱいになる。頼りになるのは、本当に地図とコンパス、そして仲間だけと思い知る。まずは、地図上ピークとなる地点を目標に樹林帯の中をひたすら進んだ。ここが地図上のどの地点なのか。地形と地図を照合する。読図は経験と人間の持つ勘も必要と思われた。

歩き始めて２時間、ハイカーたちの明るい声がこだまする昨日歩いた南側斜面とは違い、北尾根は誰にも会わず、ただ鳥のさえずる声、風のささやく音、朽ち果てた針葉樹…。ここは「静寂」という言葉がぴったりだ。ふと時代が一瞬にして逆戻りしてしまったような錯覚に陥ってしまいそうだ。スズタケの中をかき分け進んだ。まるで子供だった頃のように、無我夢中に進んだ。

歩き始めて４時間、スズタケの尾根にミツバツツジとシロヤシオの競演が見られた。また、山一面にシャクナゲのつぼみも膨らんでいた。そして、林道とも言えない大黒茂林道を横切ったのは、道迷いはなく確かな北尾根を下っている証しだった。不動滝ノ峰の先で不安定な崖状の斜面を苦労して下り、いよいよ尾根も末端にさしかかった時、またしても私たちの前に立ちはだかったのは、垂直の壁のような急な斜面だっ。赤いテープの跡が付いていたが、私には何を示しているのか見当がつかない。ようやく、泉水谷に降りることができ、おいしい水を飲んだ。

登山道のない、人間とケモノが共用する踏み跡を辿り、標高差１３０７メートルの不整地の尾根を７時間以上かけ、全員が無事下山することができた。

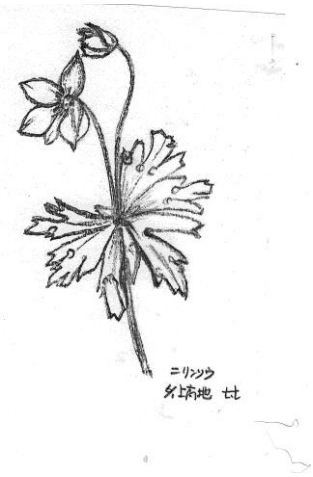
期　日：　２０１４年5月２４日（土）～２５日（日）
参加者：　黒田正雄（Ｌ）、山口文嗣（ＳＬ）、石岡慎介、柳川しげよ（敬称略）
タイム：　介山荘 6：40～7：35 雷岩～7：45 大菩薩嶺 7：55～9：10 標高 1840m
～10：50 標高 1708m～11：40 大黒茂林道 12：00～12：40 不動滝ノ峰
～14：30 水源林巡視路～14：45 泉水谷小室川谷出合～15：00 三条新橋

徳　本　峠　越　え

高橋琢子

５月３１日（土）～６月１日（日）、上高地山岳研究所運営委員会が主催する２０１４年度「徳本峠越えとウェストン祭」に参加した。千葉支部の諸先輩から「昔は、北アルプスや上高地に行くにはみんな徳本峠を越えて行ったんだよ。峠に着いたときに目の前に広がる景色は見事だぞ～」という話をしばしば聞かされ、いつか行ってみたいと思うようになった。

３１日午前５時半、安曇支所近くの集会所へ山研隊、信濃支部隊、一般の方々など多くの人たちが集まった。千葉支部から一人だけの参加と「上高地へ２０キロ」という長丁場、不安と緊張と期待が複雑に入り混じる。６時１５分、私たちの山研隊２２名が出発。島々谷川と並行する林道は常にザァワー、ザァワーと水の音が聞こえ、見上げればブナ林の淡い新緑の間から木漏れ日が。足元ではラショウモンカズラやズダヤクシュなどの花々が目を楽しませてくれた。流れを右に左に分け、丸太の橋も越えた。二俣、岩魚留小屋とほぼ予定通りに通過し、最後の急登を残すだけとなった。



そんな時、私にアクシデントが！。足がつった！。こんなことは初めてだ。水分も摂っていたし、なだらかな道で汗も多くかいていないのに…である。仕方ない。歩幅を小さくして一歩ずつ進んだ。本隊より１０分遅れで午後１時４０分徳本峠着。目の前に飛び込んできた明神・穂高の岩峰がひときわ大きく心を揺さぶった。これが先輩たちの言っていた絶景なのだ。足の痛みも忘れ、しばし言葉を失う。

峠からの景色を満喫した後、明神へと下る。例年より雪が多いという。軽アイゼンを着けての長い下降。ザッザッと気持ちよく、楽しい。明神・穂高を前にして残雪を歩く私。夢のようだ。そして無事に山研に到着し、山研役員・東海支部・四国支部・茨城支部の方々にとても良くしていただき、一人参加であることを忘れる和やかな時を過ごした。

１日、初めてウェストン祭に参加した。前日からの信濃支部の方々の準備、安曇小学校の子どもたちの参加と素晴らしい天気が相まって、心温まる催しになっていた。ウェストンが徳本峠を越え初めて上高地に着いた時の気持ちが、同じ道を歩いた者としてとても身近に感じ、先駆者の偉業を改めてすばらしいと感じた２日間だった。

浅間山大噴火の跡を訪ねて

三木雄三

野次馬根性が旺盛なものだから、新しい発見があると「へーっ、そうだったのか」とうれしくなる。そんな期待を胸に６月１４日(土)～１５日(日)、JAC 科学委員会が企画した「浅間山探索山行」の巡検に参加した。巡検とは地質見学のことである。

初めて浅間に登ったのは高校１年の春。かつて沓掛とよばれた中軽井沢の駅から歩き、山頂のお釜を一回りして湯の平で野宿、小諸駅まで歩いて帰った。大人になって小諸からバスで車坂峠へ。そして高峰温泉につかり星座を眺めた。なつかしい思い出の山だ。

巡検初日は薄紅色のコイワカガミ、白い五弁のハクサンイチゲが見ごろの黒斑山を登った。トーミの頭に近づくと新緑の湯の平をお椀の底にして、屏風のような古浅間山外輪山の内壁が強烈な印象で迫ってくる。この光景は「２万２千年前の大爆発で黒斑山の東半分が崩壊して作られた」と火山に詳しい大正大学元教授の福岡孝昭さんが教えてくれた。現在の黒斑山は

爆発で残った西半分。「爆発前は現在よりも約２００メートル高い２８００メートルの山だった」と聞き、「へーっ」と驚いた。

２日目は天明３(１７８３)年の噴火で一瞬にして村が埋まり、日本のポンペイといわれる鎌原を訪ねた。鎌原観音堂の前に石段がある。５０段あったが高さ約６ｍの火砕流に襲われ埋まり、以来「埋没石段」と呼ばれるようになったのだという。後の発掘調査で、おばあさんを背負った女性が石段を這い上がる姿で見つかった。あと数段上がれたら助かったと思うと「さぞ無念だったろう」と手を合わせた。長野県側に被害はなく、群馬県側に被害が出たのは浅間山の火口の壁と高さの違いによるものだ。有名な鬼押出し溶岩流や粘度性の高いマグマが盛り上がってできた小浅間山を登り、巡検を終えた。

投稿　夏山の思い出

日 光 ・鳴 虫 山 と憾 満 ケ淵

香高真奈美

私の夏山の思い出は、4年前の8月に二人の娘たちと登った鳴虫山です。会社の保養所があったため、日光は何度も訪れ、東照宮や中禅寺湖などへはひととおり出かけました。なので、その夏は「山登りをしてみよう」と私が提案、気乗りのしない大学生と高校生を連れ出しました。

東武日光駅で名物の「笹おにぎり弁当」を仕入れて登山口へ。日光の街中は観光客でいっぱいだというのに、山では誰とも会いません。やっと出会った地元のおじさんはラジオを大音響で鳴らしています。聞くと「熊よけだ」と言うではありませんか。女3人はビックリ。それからはずっと大声で歌を歌いながら頂上まで登りました。

頂上の広場でお待ちかねのお弁当。かすんで見える日光連山の眺めを楽しむものの、虫がいっぱい。すぐに下山です。

下りの尾根道はかなり急。笹の茂る急な道を下ると「憾満ケ淵」という不思議な流れの場所に出ました。エメラルド色の大きな水のかたまりが、音を立てて走っている。「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し」の方丈記の句を思いながらしばらく眺めていました。

確かに水はもとの水ではないけれど、あの壮大な流れはずっとある。今、この瞬間も日光のあの場所で水が音を立てて流れている情景を思い浮かべると、移ろいゆくものと不変のものを同時に感じ取ることができるのです。

日光のガイドブックには小さくしか載っていない場所ですが、本当に来て良かったです。いやいやついて来た娘たちですが、登山を終えてすがすがしい気持ちになってくれたようです。二荒山神社の下をぬけてゆっくり宿まで帰りました。

支部恒例納涼ビールパーティー

８月９日サッポロビール千葉工場に隣接する千葉ビール園で恒例の「ビールパーティー」が開かれました。

当日は 18 名の参加で普段会う機会の少ない会員、会友との会話も多いに盛り上がり、２時間の制限時間もあっという間に過ぎました。　（谷内剛）

参加者（５０音順）

小澤けい子、神山良雄、君塚紫、櫻田直克、塩澤厚、塩塚生二、篠崎仁、鈴木美代、諏訪吉春、高橋琢子、高橋正彦、竹島正義、田代貴征、田代治子、谷内剛、柳下忠義、結城純一、吉永英明

サテライトからの報告

佐　原　の　夏　祭　り　（四水会）

３００年以上の伝統行事、香取市の「佐原の夏祭り」を７月１２日、見学した。四水会の企画で、東葛地域から湯下正子さん、京葉地域からも新村貞夫さんが参加。賑やかに引き回される大人形山車や哀愁を帯びた佐原囃子の音色、そして水郷の味「うなぎ」を楽しんだ。

秩父、川越と並ぶ関東三大山車祭りに数えられ、山形の新庄まつり、岐阜の高山祭、京都祇園祭などと合わせ全国１８府県３２件の山車祭りと一括して文化庁がユネスコの無形文化遺産に提案、２０１６年度の登録を目指す祭りだ。夏祭りは本宿の祭りで、小野川を挟み対岸の新宿でも１０月に秋祭りがある。

見学した１２日は３日間の祭りのちょうど中日。夏真っ盛りで気温はうなぎ上り。四水会の重鎮、吉永さんは冷たいビールを求めて一時行方不明。それでも夕方になり利根の川風が吹き始めると、どこからともなく姿を見せ、皆を安心させた。湯下さんは「時が止まったような、とても落ち着いた街並みが素敵です」と話していた。

（三木雄三）

市　川　半　日　散　歩(一酔会)

６月２１日、梅雨の中休み、市川の江戸川沿いから東京葛飾区に至る半日散歩を楽しんだ。参加者は、会員、会友、会友候補者の９名。市川市在住で、この地を熟知する山口さんが普通は見逃すスポットを丁寧にガイドしてくれた。

１２時に市川駅に集合後、駅に隣接する市川市の公共施設アイリンク４５階の展望階からコースを確認。残念ながら富士山や筑波山は見えなかった。地上に降り立つと、弘法寺の参道大門通りを経て、手児奈霊堂・弘法寺へ。いずれも、手児奈を祀るために建立されたものだ。手児奈は奈良時代、その美貌ゆえに多くの求愛に会いながら我が身ひとつとして入水したという伝説。多くの万葉歌人の歌が残され、大門通りにはそのパネルが並べられている。弘法寺の急階段を上りつめると立派な山門、境内も広く２か月前咲き誇っていたであろうしだれ桜「伏姫桜」が手児奈を偲ぶ。次の目的地の里見公園は北条氏と里見氏が戦った国府台合戦の古戦場跡。江戸川に向かって直立する崖やバラ園の残り香を後にして矢切に向かう。左手に江戸川、右手に国府台の緑豊かな丘陵を眺めながら、梅雨には珍しい爽やかな風に吹かれゆったりと歩く。４０分もすると、矢切の渡しの目印の旗が見えてきた。渡し舟は昔は生活に欠かせない交通手段だったが今は観光資源として活躍している。櫓でゆったり舟を回す風情はまるで時代劇のよう。着岸地は、寅さんで有名な柴又帝釈天。参拝後、お決まりの寅さん団子で腹ごしらえ。

締めは、市川八幡まで京成電車で戻り、永井荷風が晩年通い詰めた大黒家で、荷風の愛したかつ丼と酒を注文、疲れを癒した。

（能美勝博）

日本山岳会千葉支部は会員・会友を募集しています。

問い合わせ先

諏訪吉春

三木雄三

房総半島郡界尾根を歩こう

11 月 29 日（土）スタート

今年 3 月に房総半島の分水嶺踏査を約 3 年半かけて終了することができました。また 6 月には県立中央博物館の公開シンポジウムにおいて概要を発表することができました。

踏査報告書のあとがきにも書きましたが、今冬シーズンより房総半島郡界尾根の踏査をスタートさせます。房総半島分水嶺踏査に引き続き会員・会友諸兄のご参加をお願いいたします。

郡界尾根とは南側の安房と北側の上総の境界である。具体的には一等三角点峰の鋸山の西の明鐘岬から東進し、水仙の嵯峨山へ。湊川支流の志駒川源流が富津市山中で郡界を越えて鋸南町大崩に食い込んでいるので、保田見から南下、人骨山、津森山を廻って八丁山へ。ここからは既に踏査した房総半島の分水嶺沿いに三郡山、安房高山、元清澄山、清澄山と東進。麻綿原の南で房総半島分水嶺を外れ、内浦山県民の森から勝浦・鴨川市境の大風沢（おおびぞがわ）川左岸尾根を南下、鯛ノ浦とおせんころがしの間の国道 128 号の内浦トンネルと境川トンネルの辺りで太平洋に達する約 60 ㎞の区間である。夏の暑さ、ヒルやハチ、マムシ対策のため 11 月から 3 月の間で計画していきます。スタートは今年 11 月 29 日（土）に鋸山から。

（山口　文嗣）

鋸山三角点と菱形基線測点

登　山　の　A　B　C（連載）

山岳会の悩みといえば高齢化と会員数の伸び悩み。そんな中で最近、千葉支部への会友入会者が増加してきた。その大半が「ツアーで山に出かけていた」と話す。登山の準備がいらず、山仲間がいなくなった人や技術的に不安な人たちにツアー登山は便利だが、反面、山の研究が疎かになったり、ガイドへの依存心が強く、とっさの危機に対応できず、最低限必要な地図の読み方さえできないといった弊害も聞く。今回は日本大学山岳部 OB の登攀隊長としてヒマラヤ遠征の経験を持つ千葉支部監事の髙橋正彦さんから『登山の基礎』をテーマに書いてもらった。連載を通して、もう一度「山とは何か」を考えてみよう。

第１話　　登山は結果よりも過程です

登山が他のスポーツと表面的に決定的に違うのは勝ち負けがない事です。そしてルールがない事です。ルールは自分自身が良心に基づいて判断します。他のスポーツでは結果が重要視されます。しかし、登山は山行の過程が重要視されます。即ち計画の把握、準備の周到、体調管理等、事前の準備が万全であるかないかで、その登山の７０％以上が決まると言っても過言ではないと思います。

ジャン・フランコは「山は根気強い、勤勉さと、沈着と、頑張りの学校だ」と述べております。一方、文学者の桑原武夫（京大学士山岳会ＯＢ、京大チョゴリザ遠征隊隊長）は「登山は文化だ」と述べております。「登山とは文化的な行為である。文明人のみのなす行為なのである・・・」。

私は遭難で岳友を複数失っております。その経験から本質的に登山が他のスポーツと違うのは「死」があることです。そして、昨今はハイキングでも遭難死があります。

登山者は「山での死」について常にとは言いませんが、一時期、考えるべきと思っております。よく一般的には「人の命は地球よりも重し」と言われます。私はそれを否定しません。しかし、登山という行為の中にあっては死ななくてもよい命を捨てた登山者も枚挙にいとまありません。動けなくなった仲間を見捨てることが出来ず厳寒の北ア雪洞の中で「おかあさん、先立つことをお許し下さい」と手記を残して亡くなった登山者もいます。

このように時としては成功と同等、いやそれ以上に遭難には強く胸を打つものがあります。そのような事からも過程が大事と言われる所以かも知れません。

このように登山という行為は哲学というか倫理感というか、そのような思考が必要です。こんなことを申しますと私は全てわかっているように思われますが、実は何もわかりません、わからないという事がわかったとしか言えません。

（髙橋正彦）

お　知　ら　せ

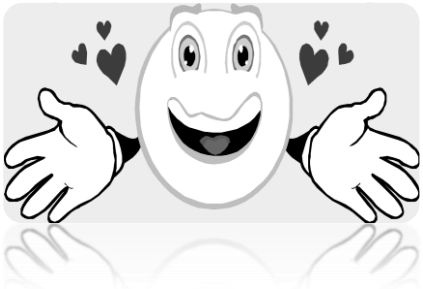
会　員　の　消　息　息

新入会員

大澤雅彦（おおさわ まさひこ）さん
山田和人（やまだ かずと）さん

新入会友

大野智子（おおのさとこ）さん
竹園清孝（たけぞのきよたか）さん
佐藤啓之（さとうひろゆき）さん
鈴木さと子（すずきさとこ）さん
小菅一弘（こすげかずひろ）さん



お詫びと訂正

支部だより第２７号（６月発行）会員消息欄で、
小疇尚さんの「瑞宝中受章」とあるのは「瑞宝中綬章」の誤りです。
また、同欄新入会友奥戸昌子さんの読み仮名は（おくとしょうこ）さんです。
お詫びし訂正いたします。

後 藤 三 男 油 絵 展

支部会員、後藤三男さん（日本美術家連盟会員・日本山岳画協会会員）の油絵展「安曇野紀行」が９月１８日(木)～２３日(火)まで、千葉市中央区中央４、きぼーる２階画廊ジュライで開かれる。安曇野の四季や房総風景など約３０点を展示する。

原　　稿　　募　　集

今年の『思い出の山旅』を原稿に書いて下さい。残雪の山、夏山の思い出などなんでも結構です。６００字程度にまとめ、写真１枚も付けて送って下さい。
１２月号で掲載します。

写真、カット等大募集

支部だよりをもっと充実させて楽しいものにしていくため、皆様がお持ちの写真、カット画、イラスト等を掲載していきたいと思います。一言コメントもつけて送って下さい。ご協力お願いします。

上記の原稿および写真、カット等の送り先
吉野　聰

役員会の報告

6月報告　　２０１４年6月２４日(火)　　市川アイリンク
出席者　　岩尾、小澤、諏訪、田代、谷内、三木、山口、山本、結城、湯下、
　　山田（本部理事）以上 11 名　　（敬称略、五十音順）
１　報告事項
・山岳会総会報告　　・三百名山７月中に刊行（千葉支部６山担当）
・「房総の魅力と富士山を語る集い」東京湾学会主催、本支部後援　６月８日（日）開催
・「房総半島分水嶺踏査報告書」の一般販売　　一部 1,650 円
２　行事予定等
・山の日制定記念イベント（記念講演会６月 29 日(日)、県民ハイク 11 月８日（土））
・台湾山行（10 月７日～12 日）　　・上高地山行（7 月５日～6 日）
３　検討事項
・会員、会友名簿作成・配布について

7月報告　　２０１４年7月２２日(火)　　市川アイリンク
出席者　　岩尾、小澤、坂上、鈴木、諏訪、田代、山口、山崎、山本、湯下、竹島監事、
　　以上 11 名
１　報告・連絡事項
・山の日制定記念講演会（6 月 29 日（日））180 名参加
・山行報告（上高地７月５日～6 日）　　・四水会報告（佐原の夏祭）
・台湾山行の進捗状況　・鳴虫山（8 月２日（土））　・ビールパーティー（8 月９日（土））
・大澤雅彦会員、平成２６年度(第１６回)秩父宮記念山岳賞に推薦
２　検討事項
・千葉支部山行実施要領の策定等　・四支部合同懇談会の準備
・会員、会友の増強運動

千葉支部だよりをカラー画面で

日本山岳会のホームページ（jac.or.jp）から、千葉支部だよりをカラーでご覧いただけます。
アクセスの手順
「公益社団法人日本山岳会」を開き、「日本山岳会の活動内容」から「支部」をクリック→「千葉支部」→「千葉支部だより一覧」と進んで下さい。

編集後記
日本山岳会編集の「新版日本三百名山登山ガイド」が山と渓谷社から７月に刊行された。上･中･下の全 3 巻で、各巻本体価格 2,300 円(税別)。千葉支部が担当した赤城山、榛名富士、荒船山、諏訪山、大山、搭ノ岳は上巻に掲載されている。
取材にあたった会員、会友の皆さんご苦労様でした。　　(S.Y 生)

山　行　の　予　定

（９月以降、支部行事等含）

行　き　先	日　程	申　込　先	締　切	備　　考
日光方面 刈込湖･切込湖	9/20(土)	小澤けい子	9/6（金）	晴香園と合同山行
台湾、玉山	10/7　（火） ～12(日)	岩尾富士夫	申込終了	
全国支部懇(埼玉支部主催)	10/18(土) ～19(日)	谷内剛	申込終了	
富山	11/8（土）	三木雄三	10/31(金)	山の日記念イベント
荒船山	11/15（土） ～16(日)	小澤けい子	10/24(金)	募集人数 ２０名
第１回郡界尾根	11/29(土)	山口文嗣	11/21(金)	房総半島郡界尾根を歩こう 詳細１３ページ
第２回郡界尾根	12/20(土)	山口文嗣	12/12(金)	同上 忘年山行
大坪山と東京湾観音初詣	1/10(土)	山口文嗣	1/5(月)	新年山行
四支部合同 懇談会	2/7(土) ～　8(日)	結城純一	未定	房大山（館山）
高川山	2/21(土)	小澤けい子	2/8（日）	晴香園と合同山行

「新❤発見チバ×Ｍｔ．Ｆｕｊｉキャンペーン」

世界遺産に登録された富士山と千葉の関わりを掘り起こすキャンペーンを千葉県が行っている。

これは、その活動を県内外に発信するため作成したロゴマークです。